

ミンダナオの風

執筆編集*松居友 発行：ミンダナオ子ども図書館



ミンダナオ子ども図書館のなかに
スタジオが出来た!

ここで民族音楽のレコーディングや
ドキュメンタリー映画の制作
絵本や童話の編集などを

子どもたち、若者たちと始める。

この地に伝わるさまざまな音楽や文化、

先進国から失われた

自然と密接に結びついた生活の様子

素朴な子どもたちの遊び

豊かな感情にあふれた仕草や表情。

それを、子どもたち、若者たち、

現地のスタッフや私たちが

自分たちの力で創造する時が来た。

外国やマニラの大都市から持ちこまれた

絵本や文化を、山の僻村に持ちこんで

MCLの子どもたちや若者たちが、

貧しい「僻地」の「可哀想な」子どもたちに

伝え広げる事も大事なかもしれないが、

ミンダナオの山や湿原地帯に住んでいる

貧しい「僻地」の「可哀想な」子どもたちが

自らの力で、先祖から伝わってきた

豊かな文化を再創造し

新たな創造を生み出して

映像や絵本や童話といったさまざまな形で

ミンダナオから世界に向けて発信する。

その事によって、自殺やイジメの多い

孤独で心の貧困に悩む

先進国の子どものみならず若者たちを

救済する事が出来るかもしれない。

和平に向けての 枠組みで合意

フィリピン、ミンダナオのイスラム反政府勢力MILFが政府と、和平に向けての枠組みで合意したという、非常に嬉しいニュースが10月8日、世界を駆けめぐった。

MILF側は、今回の交渉が決裂したら、全面戦争だと言っていたから、とりあえずミンダナオ全体を巻きこむ戦争は回避された。その意味では、心からホッとした。



去年、一昨年あたりから、イスラムの戦場地域の奨学生や卒業生で、現地から遠いダバオやコタバト市、ひいては海外に脱出しようとする子たちが増えていた。はつきり口にはしないものの大きな戦争を恐れていたから・・・。

とりあえず和平へ向けての交渉は、枠組みにおいて合意した。しかし、過去の経緯もふり返って現状を見ると、樂觀的にはなれない。とりあえずイスラム自治区の拡大と、MNLFに代わってMILFが自治権を獲得してイスラム自治州を作り、内閣制を確立する方向で行くという「枠組み」が決まっただけで、MILFと政府が交渉の土俵に登ったところであり、これから本番にはいる。

交渉の限度期間は3年半後のアキノ政権の終わりでという期限付きで、見方を変えれば、それまで結論が先送りされたとも言える。大統領は再選が許されない構造だから、次期政権になった場合、どのようなのかは不透明だ。

MILFと政府との交渉がうまく進んだとしても、それ以外にも不安な要素は多い。

ただ、この時点まで見ると、今回の平和構築活動でUNHCR(国連高等

弁務官事務所)も含め、日本の果たした役割は大きいと思う。

ミンダナオのケースは、緒方貞子氏がJICAに移籍してから、日本政府としての初めての本格的な平和構築の試みだと聞く。コソボなど今までは、戦後処理に関わってきたが、今回は、係争中に乗りこんで停戦を模索する、初めての試み。そのなかでも、とりわけIMT国際停戦監視団の働きは大きかった。JICAからIMTには、落合さん等が派遣されていて、ブアランの小学校建設などで協働している。ミンダナオを発つ直前に落合さんが、突然MCLを訪れ情勢について語った。和平交渉の枠組み合意の可能性にも触れた。落合さん、ご苦労様です！

UNHCRにも今井さんがコタバトに派遣されており、国際停戦監視団の働きやJICAともども、これからの動きが期待される。微力ながらMCLの活動も評価されて良いとは思うものの、平和構築に関してはこれからが本番でしょう。

ミンダナオ子ども図書館は、特定の宗派や政治の下では活動しない方針。だが、真に子供たちの平和を実現するための良い企画に関しては、世界の国々の政府や国連をはじめとして、仏教、

イスラム教、キリスト教のプロテスタントやカトリックとも連携を持ちながら行動している。

その良い例が立正佼正会の「ゆめポッケ」と呼ばれる親が作った巾着に、親子で選んだぬいぐるみや学用品を入れたのを、戦地で影響を受けた子供たちに届ける企画。今回も、戦地での戦いの狭間に二つの保育所の開所式を行い、ゆめポッケを配り、現地で不安の中で生活している親子に多いに喜ばれた。つい数日前に、大砲の音が聞こえ、戦車が入っていた地域だ！



また創価学会の大学でも講義して若者たちが訪れたし、今回戦場の狭間を突いて開所式した實相院発菩提心の会(面白いことにサンタクロースの会と名付けられている)や日本のおばさんからの支援で建てた保育所も、戦場でおびえていた人々に笑顔をあたえ、平和に大きな貢献をした。

それ以外にも日本イスラミックセンター、プロテスタントやカトリック教会、修道会などからも多大の支援を受



けている。90%は団体と言うよりも個人の皆さん方の支援です。

今回の和平交渉に関しては、まだまだ背後には多くの問題も火種も抱えているのが現実だろう。

問題の一つは、イスラム自治区を州としてさらに拡大するにしても、MNLFが統治してきたARRM地域などを、今後どのように平和的に取り込んでいくのだろうか。

MNLFとMILFは、協調するところもあるものの、互いの勢力争いからリドーと呼ばれる小規模な戦闘をくり返し起こしていて、ミンダナオ子ども図書館でも子供たちと、度々戦争避難民の救済に出ている。

リドーと呼ばれる小規模な戦争は、マスコミにもほとんど取り上げられないし、政府やNGOの救済もなく、ミンダナオ子ども図書館だけが救済支援を行った例も多い。なぜミンダナオ子ども図書館が、こうした場所にまで向

かうかという、MNLF地域からも、MILF地域からも、はたまた政府よりの地域からも、もれなくスカラシップの子供たちを採っているし、地域のコミュニティと、読み語りや医療などで長年にわたり密接な関係を築いているからだ。

皆さんがたが、支援してくださいっている、我が子のような子たちが避難しているの聞いて、放っておくことは出来ない！

今回、大規模な戦争は、とりあえず回避されたとしても、小規模なあるいはかなり大規模なリドーと呼ばれる地域紛争は起こる可能性が非常に高い。とりわけ来年の5月は、フィリピン全体の地方選で、日本では想像できないが、議員や市長や村長などの有力者は、



広大な土地を持った領主たちで、彼らの利権を狙った権力闘争の一つが選挙なのだ。それゆえ非常に生臭く、暗殺や私兵を使った紛争も起こされる。たとえMILFが自治を行うにしても、膨大な兵器を持った私兵や民兵を、本当に抑え込むことは不可能だろう。

また、BIFFなどの分離派も火種の一つだ。BIFFとは、バンサモロ・イスラム・自由戦士と呼ばれる集団で、もともとMILF内部の過激派集団と呼ばれていたもの。すでに8月のラマダン明けに戦闘を開始して、私たちも避難民救済に出たが、MILF側から、政府との交渉が終わるまで待つように圧力をかけられて、ここしばらく沈黙していた。

その沈黙の合間を縫って、私たちミンダナオ子ども図書館は、最も危険な戦闘地域に建てつつあった二つの保育所の完成と開所式を行った。

MILF自体が、MNLFが政府と妥協してARRM（イスラム自治区）

を確立したことを不満として、あくまで独立を目指すため、過去にMNLFから分離した歴史を持っている。BIFFはそんな過去のMILFと同じように、現在、和平交渉でMILFが政府に対しての独立要求を緩和させて自治州にしたことに対する不満をすでに表明している。

BIFFは、通称2000人、MILFは18000人の兵士を持つと言われているが、MILFの兵士、または人々や若者たちのなかにも、今回の妥協を不満とし、あくまで独立を理想とする人々も多いはずで、それらの人々がBIFFに流れ込み、新たな闘争を始める可能性も大いにある。

本来MILFは、ミンダナオ島全体の分離独立をかけたかった。さすがにそれは私にも非現実的に思えたものだが、それが駄目でもミンダナオの少なくとも自治州は、フィリピン政府から独立した国家となるべきだというのが主張だった。

東ティモールが独立したときから、キリスト教徒地域は国際支援で独立させて、イスラムが400年にわたって独立を要求し続けているミンダナオは、なぜ駄目なのか・・・これが、インドネシアなどを含むイスラム教徒の率直な気持ちだったからだ。ジェマイ



スラムアをはじめとして、こうした気持ちも、根強く抱いている人々は、今も未端にいたるまで少なくない。

彼らがMILFを構成し、今まで命がけて独立闘争を戦って来たとしたら、今回の自治州の締結は、期待はずれの妥協以外の何物でもないだろう。こうした人々を巻きこんで、BILFFが活動を開始する可能性は高い。今回の結果を受けて、BILFFは、すでに戦闘を開始すると宣言している。

MILFと政府側の平和交渉の影の狙いの一つは、国際的な他国の関与も含めて、旧ARMM自治区も含

む石油と天然ガス資源の権利を握ることだろう。

今回のMILFと政府との交渉のテーマはいくつかあるが、表向き独立自治区の拡大を要求する背後には、リグアサン湿原の膨大な石油と天然ガス資源の利権を、どこが握るかという非常に具体的な問題が隠れている。

これに関して政府側はMILF側に対して、半々でどうかと言っていた。最終的には、MILF側が4分の3、政府側が4分の1を得るということで折り合ったようだが、結局MILF側も、今までMNLFFが統括していたリグアサン湿原の石油資源を、全面的にMILFが管理するという方針に対して、独立要求を取り下げて自治州で妥協したという感じもする。

私を見る限り、MILFは、貧困層を巻きこんで活動しているので、MNLFFの時よりも貧困の問題に関して若干進歩があるかな?と思ったりもするのだが、どうだろうか。

石油の多くは、MNLFFが支配していたARMM地域のリグアサン湿原から湧出しているし、こうした地域のプランテーションも、私兵を擁

した大土地所有者が絡んでいて、彼らは同時に政治家でもあり、しかも、その背後には軍や国際的な資本が絡んでいたりする(アンパトワンなどが、その良い例だろう)。MILFも含めて国際的な資本には、米国、EU、中東や他の東アジア諸国もかかっているし、地下には中国も影響力を持っている。

今回舞台になっているミンダナオのイスラム地域も、開発支援という名目で、交渉後も国際的な資本が入ってくるだろう。

開発によって現地が根底からうるおえば良いのだが、ミンダナオの他のクリスチャン地域のように、多くの自給自足の人々が自給地から追い払われる結果になると問題はさらに複雑化するだろう。

例えば、カガヤンデオロでおきた洪水やリグアサン湿原の洪水も、またフィリピンの他の地域での洪水さえも、川沿いに住む貧困層や反政府組織を追い払う目的で、ダムが意図的に放水されて鉄砲水が作られて、貧困層が避難民収容所に入れられた後に、帰ろうとしても自給地に戻れない体制が形作られているという。

少なくともカガヤンデオロは、帰れない。

又聞きの話ではあるものの、ダムによる洪水も現地では、戦闘による避難民化と同様の貧困層排除の手段ではないかと言ったことが、イスラム教徒のみならず、とりわけ先住民のあいだで語られており、強いダム建設反対運動へと向かっていて、それが原因で別の地域で戦闘も起こっている。しかもそのダムが、結構日本政府の支援で造られていたから複雑な気持ちだ。

ここから言えることは、たとえ交渉が成立しても、その結果、貧富の格差が拡大するとしたならば、今後あらゆる形で戦闘が起こり続けるだろう。未だに、NPA(新人民軍)との戦闘が、ミンダナオ、あるいはフィリピン全域で起こっているように。





戦争の問題は、開発による貧困格差の助長の問題とつながっている。根本的に、貧困の問題が解決されない限り、戦争はこの地で起こり続けるような気がしてならない。

リグアサン湿原で石油や天然ガスの発掘が行われた場合に、もう一つ心配なのは、環境破壊だ。

MCLのホームページの写真からもわかるように（検索：ミンダナオ子ども図書館）戦闘が起こる地域は、リグアサン湿原地域で、その自然環境は驚くべき素晴らしさだ。巨大な魚やワニ、天然記念物の白

頭鷲のような貴重な鳥や植物も息を削いで、原始の自然を感じさせる。そして、何と多くの漁民がこの湿原を漁場として生活している事か。

こうした点から、ラムサール条約などを締結して自然を保護し、観光こそがこの地の経済発展に良い方向だと思ふのだが・・・

これは、日本も同様で、アジアの別の国から見ると、日本ほど狭い地域に、アルファからゴミのない美しい海岸、雪の降る北海道から南国の沖縄、京都や奈良の歴史や森の美しさで美しさを誇るまで、コンパクトで多様で美しい場所が広がっている国はなく、安全で人々は礼儀正しく親切で・・・中国や韓国の人たちなどが、なぜ観光に来たがるかが良く理解できる。

ところが、愚かにも、原発で放射能で汚染された日本。尖閣や竹島で、隣国と戦争も厭わない危険な国民性を持った非礼な日本人、と言う悪いイメージばかりが広がられている。ミンダナオでも、戦争中に穴を掘ってマノボ族を大量に生き埋めにしたり、山に逃れた軍隊が食料に困ってマノボ族を襲って食べたと言

う話まで残っていて、そうしたイメージが復活すればするほどに、観光業は大打撃を受けるばかりか、華僑による中華系資本は、フィリピンばかりではなく、インドネシアやベトナムやマレーシア、東アジア全体に広がっているから、日本車や日本製品のホイコットは、東南アジア諸国にまで広がっているのが現実だ！

ミンダナオ子ども図書館のヴィジョンには、宗教や民族の違いを敬意を持って認めながら、互いに心から愛しあうことが謳われている。

これは、聖書の「隣の人を自分のように愛しなさい」という言葉の実践であるが、これからの世界は、ミンダナオ子ども図書館で行われている実践を、国境を越えて行わなければならないと思う。

「隣の国を、自分の国のように愛しなさい」そうすれば、戦争も無くなり、共存互恵の世界が新たに生まれるだろう。

域が、平和に発展するためには、貧困層を排除することなく、教育の機会均等を実現し、学校教育では伝えられないことを、読み語りや医療支援のような活動で、子供たち、若者たち自身が中心になって行う場を作っていくことだろう。未来は、子どもや若者たちだから・・・

日本も含め、海外の支援も、資源獲得や開発だけではなく、より多く教育や医療や環境保全の視点から、現地のニーズや状況に合わせて、ヒナイヒナイ、バスタカヌナイ（ゆっくりゆっくり、でも絶えることなく）展開していく方が良いだろう。

少なくとも、ミンダナオ子ども図書館は、そうした水牛のような歩みをこれからも続けていきたい。若者たちや子供たちと手をつないで！



今回のMILFの地

郵便振替口座番号 00100 0 18057

加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしく願います。

ある時代には、女性が発言権を持たない存在だった。自分で判断する能力を持たないもの。だから、従属しなければならぬもの。

ある時代には、それが特定の人種・民族と呼ばれるものだったりした。だから子どもが自分で判断できないからと、すべて大人に決められ、大人が代弁し、大人が作ったルール・社会で生きさせられていることだって、後世になつたらなんてばかなことと呆れられるような、そんな最後の「差別」が、実はこの世界の子どもの扱われ方の、本当の姿なのかもしれない。だなんて、空想してみたりする。

ミンダナオ子ども図書館は、その名の通り？子どもたちの館である。悲しいかな私が子どもと呼ばれることを、周りから許される時代は、気づかぬうちに、あつという間に昔の話になつてしまい、たぶん昔思っていたような、つまらない大人になつてしまっているんだけど、それもまあしょうがないじゃないと聞き直っている、そこそつまらない大人な私も、そんな子どもたちにもまれながら館に住む。

ところで子どもといっても、まあ当然いろんな子どもがいる。初めてここに来たときは、どの子もみんな明るく素直で人なつっこくて、表現力豊かで、面倒臭がよくて働き者で…なんて思ったりした。ところがどっこい、そんな子どもたちだけじゃない、というか、そんなはずはないのである。

物理的にも、感覚的にも、遠く離れたものを想像するのはちよつと難しい。フィリピンの子ども、発展途上国の子ども、南の子ども、貧困層の子ども、だなんて言うとき、ちよつと想像力はマヒしてしまう人が多いんじゃないかと思う。なんかテレビで見ただけじゃないかんじ、かわいそうな子ども、逆にだからこそ心は純真で…

でも、つまりはただ同じ人間。いろんなフィリピン人がいれば、いろんな捉えやすい人懐っこい子たちの後ろにいて見えにくい、10日そこらの滞在じゃ、とても心を開いて寄ってきてくれてくれない、そんな子たちだつてこの子どもだ。

いろんな子ども、それは村単位で違っていたりもする。マノボ族の村の子たちは、すごくシャイだけど、笑いかけたら恥ずかしそうにはにかんでくれたり、カメラに興味津々でつられて

だんだん近寄ってきたり。イスラム地域なんかでは、外国人なんて滅多に來ないからか、笑いかけてもびっくりしてふいと逃げてしまう、カメラを向けても顔をこわばらせて目をそらすだけ、なんてこともあって、村々で色がある。この村の子たちは笑わないなあという村は、むしろ町に近い地域だったり。

ひとりの子にフォーカスしてみても、この間までお菓子ちようだい、しかなわない駄々っ子だったのに、アレ最近よくお手伝いするなあ…みたいに月単位で変わっていくのもおもしろい。まあ100人も子どもたちにもまれていると、おもしろいだけじゃ済まなくて、あーあ…それにさわるなーっ、だつたり、ああ…ちよつとでいいから静かにして…だつたり、まさに台風の目で、このくそがきー、だなんて思うことも、しょっちゅうあつたりなかつたり…。

そんな台風の目と常に一緒にいなければならぬ親なんて、実際どれだけ大変だろう。これも大人の勝手な言い分なんだけど、子どもを育てるといふのは、本当に大変だ。

でも、こちらでは誰でも実に上手に子どもの面倒を見る。大人から、君まだ抱っこされる側でしょうっていうく

らい小さい子まで。男の人でも女の人でも。いかついおっさんが慣れた手つきで赤ちゃんをあやしていたり、イマドキなにちゃんもご飯を食べさせてあげてたり。なんていうのを見ていると、案外子育ても、こっちは日本みたいにそう大変なことでもないのかもしれない。

だからって、こっちの子どもたちが育つ過程で、何の問題もないっていうのではなくて、やっぱりMCLも思春期の子どもたちをたくさん抱えているので、そんなこんなの問題は、悲しいかなしょっちゅうあつたりする。

支援者の方々がっかりさせてしまふのは申し訳なく、「おとな」としては、何とも頭が痛いのだが、でもきつと子どもが育つということは、そういうことなのだろう。変わっていく、良いことも悪いことも含めて。

たった一年で体のサイズもまるつきり変わって、寂しいことに態度もクルに…そんな成長する子どもたちを目の当たりにしていると、人が育つというこつとすこいなあ、と思う。

育つこと、変化すること、生命のパワーって、すごい。

箱いっぱいクレヨン

松居陽

色と色の間のそのまた間を取ってあげば、無限色のクレヨンが出来るのだろうか。

で、そのクレヨンで点を描いたら、その直径は半分、また半分と、永遠に分けられるのだろうか。

そして、そんな永遠がひとつのスペクトルとして、一枚の絵として今生きている。限りなく、たった一つの世界。宇宙は、そんな矛盾で出来ている。人は、その傑作だ。

限らない可能性から一つ一つ道を選んできたはずなのに、気づけば初めから筋書きが決まっていた、かと思つと道なんてどこにもなく、また何事もなかったように道を選び出す。

時の流れを経験してきたはずなのに、永遠に今から抜け出せず、形は変わっても素材は変わらず、そんなことを考えていたらむしろピザが食べたくなる。

従うだけの人間になるな、と人に言

いつける。

信仰の時代は終わったのだ、と無を信じ、説き歩く。

人を傷つけることを非難するかと思えば、それが愛する人の仇と知ると、正当化する。それが、美しい！

どんなにがんばって一方にしがみつこうとしても、かたくなな矛盾を逃れることが出来ないんだ。なんて最高のユーモアだろう！「こんなに真剣なんだぞ！」と力むほどかわいらしいじゃないか。

みんなそうなんだ。

みんな矛盾で出来た、矛盾の子なんだ。そんなどうしようもない自分を冗談のように味い、笑える人は幸いだ。

笑いの大切さを、ミンダナオは教えてくれる。

僕らが悲観的にとらえる状況を、彼らは笑って過ごしている。自分の苦しみほど、いいジョークになるものだ。どうしようもない状況ほど笑い飛ばすので、真面目な僕らは馬鹿を見る。そして、笑いは二つの世界をつなぐ。僕のような外国人とミンダナオ人の関係は、気まずくややかしい。

経済的な違い。習慣や信仰の違い。外国に触れたことのない人たちは、

僕を見て一瞬ためらう。

先人観を持たれているとますますやりにくい。目が合う。沈黙。緊張感。たまらなくなつて、互いにぶつと吹き出す。笑いが空気を和らげる。

ふと気がつく、それまで二人を区切っていた思いが吹っ飛んでいる。理屈で話していると思っていたら、空気で話していたんだ。

矛盾に笑えるようになったら、どんなアタックしてみる。今まで認められなかった最大のコンプレックスを、裸になったつもりでぶちまけてみる。

一番恥ずかしい自分、一番人間くさい自分を軸に生きてみる。すると、自分が楽しくてしょうがない。みんなも楽しくてたまらない。

一番望んでいることを

好んで否定する僕らが素直になれたら、

世界は壊れるだろう

か？

それとも癒されるだろうか？



見てもういたくて、感謝されたくて、いつも夢見ているけれど、

その場になるとさも何でもなさそうに振りかぶる僕らが、子どもみたいにほしゃけたら？

あの子に怖いほど焦がれる心を何とか取り押さえようとする僕らが、花開いたようにその優美に見惚れられたら？

打ち震える心、駆け巡る血、舞い上がる体。

と思つたら、疲れて眠くなつてきちゃった。密やかなひと時。放つておいてほしい空間。なんでもありの、ダイナミズム。

気づいたら、あなたもミンダナオ化してるかも・・・

山菜売りの少女 3

前号からの続き

姉ちゃんの村は、貧しくて、エンピツも買えなかったり、お弁当も持って行けなかったりする子がほとんどなの。時には五日も、ご飯が食べられなかったりするのよ。

「5日も食べなかったら、お腹ペコペコになるでしょう!」

ペコペコを超えて、とっても痛くなってくるのよ。小学校まで行けば幼稚園があるけど、山道を8キロも歩いて通うから大変。小学生たち、朝四時に出かけるのよ。

「それじゃあ、三歳や四歳の子どもじゃ、とっても無理ね。」

雨が降ると、川があふれてわたれなくなつて、家まで帰れないこともあるの。流されて死んだ子もいるつて。

「小学校を卒業するだけでも、命がけね。」



卒業できればまだいいけど、一年生に一〇人はいったら、二年生までに七人はやめていく。ほとんどが、貧しいマノボ族の子どもたち。

「どうして?」

二年生になると、午後の授業があるからよ。

「なぜ、午後の授業に出られないの?」

だって、母さんや父さんは、朝早くから夕暮れまで、山でお仕事。兄ちゃんたちは、小学校のころから、山仕事をてつたうでしょ。

「学校にいつているのが、女の子が多いのは、そのせいね。男の子は、働かなくっちゃ。」

女の子も働くのよ。姉ちゃんは、家に残つて、年下の弟や妹や、赤ちゃんをおんぶしてめんどうを見るでしょ。

お姉ちゃんが家事育児をしているあいだ、妹たちは、森や野原に、食べ物さがしに行かなくちゃならないの。山菜売りに、遠い遠い町まで行く子たちもいる。わたしたちみたいに。

「食べ物、何を見つけてくるの?」

森や野原にはえている、山芋や野生のバナナ。沢だったら、カエルやカニ。トカゲも食べるわ。年上の男の子だったら、狩りに出かけて、猿やイノシシをとったり、ニシキヘビを捕まえるこ



ともあるのよ。これはめつたにない大ごちそう。ニシキヘビは、蒲焼きにするともおいしいよ。

それから、洗濯と水くみは、下の女の子たちのやくわり。谷底まで、一時間かけて、洗濯物をかついでいって、そこで父さんや母さんや兄ちゃんや、小さな弟や妹の服を洗って干すの。

洗濯が終わったら水浴び、これほとても楽しい。帰りには、干しあがった洗濯物といっしょに、谷の水をプラスチックの大きなボトルにいれて、急な斜面を登って帰るの。

「何のためのお水?」

飲み水や、お皿を洗ったりするためのお水。手が空いている子がいたら、森に落ちている木の枝をひろい集めて、肩にかついで帰ってくるの。

「なんで、木の枝をひろったりするの?」

たきぎにするのよ。夕方に、父さんや母さんたちが帰ってくるから、山芋やバナナをふかしておくの。

「お米のご飯は食べないの?」

お米って、買わなくっちゃならないでしょ。だからめつたにしか、食べられない。父さんたちが、山の斜面で育てている、トウモロコシの収穫があったり、兄ちゃんが、下の村の田んぼの草刈りなど、日雇い仕事で働いたりして、お金が入ったときとか。母さんが、洗濯女をしたり、子どもたちが、山菜売りに町に行けば、お金が入ってお米がかる。わたしたちみたいにね。

「そうだよ。お米って買わなければならぬもんね。」

だから普段は、そこらに生えている山芋や野生のバナナを蒸かしてたべるの。父さんや母さんや兄ちゃんはお仕事で疲れているし、おかずのカエルを料理したり、おイモやバナナをむしたりするのは、女の子たちの役割。

「そんなにたくさん、お仕事があったら、学校どころじゃないよ。」

二年生になって、午後の授業が出てくると、学校をやめてしまう理由よ。

「夜勉強したらいいのに。」

電気がないから、夜はまっ暗。光っているのはホタルだけ。小学校を卒業して、高校生になるだけでも、夢のまた夢。

「そんなわけだから、保育所の先生になれる人もいないんだ。」

日々の活動を、豊富な写真で、随時更新報告しているMCLのサイト

<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

ウェブ検索『ミンダナオ子ども図書館』、必見です!



いてくるのが見えた。さすがに少し疲れた顔だ。

「休もう。」

ギンギンはいうと、木陰にはいり、山菜のつまったタライを地面において大木の根もとにすわった。

「うえの姉ちゃん、どうしているかなあ。」

ギンギンは、十四歳で結婚して、山のおくに住んでいる姉ちゃんのことを思いだしていた。

「結婚してから、一度も会ってないね。」クリステインがいった。

「姉ちゃん、赤ちゃんが生まれたって、母ちゃん、いつてたよ。」ジョイジョイがいった。

「うん、姉ちゃんのお産のときにいったもんね。男の子だったって。」

そのとき、大木の上のほうから、ヘリコプターがおりてくるような音がした。

ブルルルルルルル、ブルルルルルルル

あんまり大きな音なので、ビクッリして見あげると、大きなカブトムシが飛んでいる。

「大きなバコカン！」

(バコカンというのは、カブトムシのこと。ミンダナオのカブトムシは、ヘラクレスオオカブト、とよばれてい



て、とても大きく、角が三本ある。)

大人の手のひらほどもある大きなカブトムシは、ヘリコプターのように三人の子どもたちの頭上をまわると、ドサツと音をたてて目の前におりた。ビクッリしている子どもたちの前に着陸すると、カブトムシは、三本の長い角をニョキッと前につきだして、黒くキラキラ光る目で、子どもたちをじーっと見つめた。

「キャッ！」ジョイジョイが悲鳴をあげた。今まで見たこともないほど、大きな大きなカブトムシ!

カブトムシは、ギョッギョッと奇妙な鳴き声をたてながら、三本の角を動かして、子どもたちのほうへ歩きはじめた。

ジョイジョイは、ビクッリして、クリステイン姉ちゃんの左腕にしがみついた。クリステインは、となりのギンギン姉ちゃんの左手をにぎった。

そのとき、三人の頭上で、

ゴォーッ、ゴォーッというものすごい音がしはじめた。見あげると、大木の枝葉が、大風が吹いているかのようになり、大ゆれにゆれている。

次の瞬間、予期していなかったことが起こった。ギンギンとクリステインとジョイジョイの体が、ふっと浮きあがったかと思うと、ものすごい勢いで梢のあいだをすりぬけて、上へ上へと昇りはじめたのだ。まわりで、葉や小枝が音をたてて激しくゆれた。木の上のほうにいた猿たちが、悲鳴をあげながらとなりの枝に逃げていく。

勢いはどんどんまし、ギンギンとクリステインとジョイジョイは、おたがいに手をにぎったまんま、とつぜん梢のてっぺんから空中にとびだした。

あつというまに大木が、下のほうへと遠ざかっていく。足もとに、緑のジャングルが広がった。左に谷間が見え、いつしゅんギンギンたちの家も見えた。ギンギンたちは、手をとりあつたまま、谷ぞいを上流へと飛び、ジャングルのうえを飛びぬけて、今朝、山菜をとってきた池に飛びだした。大きなラワンの木が見える。

「手をふっているよ。」ジョイジョイがさげんだ。

池を見下ろすと、青や赤や黄色の服を着た、こびとのような人たちが、池

三本角のカブトムシ

わたしは、小学校の二年生にまでなったけど、三年生にはなれなかった。父さんが死んでいないし、町に山菜を売りにいかなくっちゃいけないから。だけど、ジョイジョイは一年生にもなれない。

「かわいそうな、ジョイジョイ。」

ギンギンが、後ろを歩いているジョイジョイの方をふり向くと、ジョイジョイの頭の上ののっているタライのパコパコがチカッと光って、光のしずくがキラキラポロリと地面に落ちた。

三人は、森からでると、ゴムの木の林のなかにつづいている小道をぬけていった。お日様は、空高くのぼり、あわい緑のゴムの木の葉陰から、木もれ日が落ちてくる。

ギンギンが後ろをふりかえると、ジョイジョイが、少しおくれぎみにつ

郵便振替口座番号 00100 0 18057

加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』

購読料程度の自由寄付でも結構です。よろしくお願いします。

や湿地や木々のかげから、しきりに手をふっている。それもつかのま、ギンギンたちは、ラワンの大木の先端から、ものすごい勢いでまっすぐ空へ向かって飛びあがった。

姉ちゃんの村

目の前に真っ白な滝が見えた、と思ったら次の瞬間、広い広い青空のなかに高く高く舞い上がった。目の前に、大きな山。

「わー、アポ山だ！」ギンギンがさげんだ。

『ぼあちゃんの言葉が浮かんできた。アポ山は世界で一番高い山。昔から妖精たちのすんでいる、神聖な山なのさ。死んだ人たちの魂は、みな、アポ山に集まってくる。ここから天国に昇っていくんだよ。人だけじゃなくて、動物たちも、木や草花も、岩や水にいる妖精たちも、みなこの山に集まってくるんだ。』(アポ山は火山で、山頂には小さな噴火口もある。フィリピンの最高峰で2954メートル。)

「すごいねー。」

「遠くに海も見えるよ！」

「きれいだなー。」

ビックリしているのもつかのま、空



高く舞い上がった子どもたちは、とつぜんすごいはやさで、ジャングルに向かって急降下しはじめた。緑の森が、どンドン近づいてくる。すると森のなかに、少し開けた場所が見えはじめた。

「村だ！」ジョイジョイがさげんだ。

むらのまんなかには広場があり、草葎きの竹で出来た小さな貧しい家々がまわりを囲んでいる。

「村のようす、なんだか変だよ。」クリスティンがいった。

おおぜいの人たちが、家の中から走りでてきたり、広場で大声でさげんだり、家の中に飛びこんだりしている。

「なんだか、あわてているようす。」

ギンギンたちの下降するスピードは、しだいに遅くなり、集落の左はじにたっている、草ぶきの家の前にふわっと降りた。まるでさっきの、大きなカブトムシのように。

目の前のベンチに、赤ちゃんをだっこした若い女の人がすわっている。

「あつ、姉ちゃん！」クリスティンは、おどろいてさげんだ。

「姉ちゃん！」ギンギンとジョイジョイもさげんだ。

ところが、姉ちゃんは、ちょっと不思議な顔をしただけで、なにも気がつかないようす。いたたまれなくなると、三人の子たちは、目の前にいる姉ちゃんに飛びついた。すると、不思議なことが起こった。飛びついたとたん、姉ちゃんの体をするりとぬけて、竹壁もぬけて、家のなかに飛びこんだのだ。

びっくりしたけれども、子どもたちは、開いている家の戸口から外にでると、姉ちゃんの前に立って、いった。

「姉ちゃん、元氣？」

「わたしたちよ、ギンギンとクリスティンとジョイジョイ。」

大きな声でいっても、姉ちゃんには、聞こえないうすすが少しもない。姉ちゃんは、なぜか緊張した顔をして、広場を歩き来している人たちのほうを見つめている。

すると広場から、一人の男が、姉ちゃんのところにかけてきた。姉ちゃんは、立ちあがって彼を迎えるといった。

「どうだった？」

「大変だ。兵隊たちがやってくる。ここも、戦闘になるぞ。はやく逃げよう！」

遠くの山おくの森で、パンパンパンという銃声が聞こえた。広場のほうから、キヤーツという悲鳴がした。

「どこに逃げるの？」姉ちゃんは、泣きだしそうな顔でいった。

「ポアイポアイ村へ行こう。あそこだったら安全だ。」

たった今はいった知らせだが、あそこに行けばMCLがビニールシートを配って、寝るところも用意してくれる。炊き出しもしてくれるそうだ。

ギンギンは、驚いてさげんだ。

「姉ちゃん！」

姉ちゃんは、ふっとまわりを見て、不思議そうな顔を見ると、夫にいった。

「なんだか、妹たちがいるような気がするの。」

「馬鹿なこといっていないで、はやく、避難するんだ。」

そのとき、ゴォーッという音がして、風が吹きぬけたのかと思った瞬間、ギンギンたちは、自分たちが、森のなかの大きな木の下に座っているのに気が

がついた。

目の前にいる三角の大きなカブトムシは、急に羽を広げると、ブルブルルルと音をたてて、木の高みをめざして飛びたった。上の枝からは、キャツキャツと猿たちの声がある。

「姉ちゃんがいる村に、行ったような気がする。」ギンギンがいった。

「戦闘が起こりそうだって、とつてもあわててたよ。」ジョイジョイがいった。

「ボアイボアイ村に避難しよう、って話していた。助けに来てくれる人がいるって。」クリステインがいった。

子どもたちは、みんながみんな同じ夢を見たことを不思議に思ったけれど、置いてあった山菜のタライをかつぐと、歩きはじめた。

サリサリの犬

丘をこえ谷をぬけて、それからどれだけ歩き続けたことだろう。ギンギンたちは、ようやくじやり道にでた。自動車や、やっと通れるようなでこぼこ道。後ろの方から、荷台にバナナをつんだボロボロのトラックがやってきて、すぐよこをゆっくりと走りぬけた。所々に、土台がコンクリートで出来



ている、家らしい家が見えはじめた。小作人の家。この辺に住んでいる人たちは、地主の持つている農場に生えているゴムの木の汁をしぼったり、バナナ農場の仕事を請けおったりして生活している。

（地主自身は、医者や弁護士や銀行家、政治家や会社の経営者だったりして、大きな町の大きな家に住んでいる。）

自分の土地じゃないんだけど、そこそこ収入もあるし、家の外にはサリサリもある。サリサリというのは、個人の家にいる小さなお店。ばら売りのキャンデーや、小さな袋に分けられて

入ったビズケット、石けんなどを売っている。

ここでは、小さな子どもでもキャンデーを買ったりしている。だけど、わたしたちは、お金がないから買えない。サリサリの前を歩きながら、ギンギンたちは声を出した。

「カンコン、タクワイ、パコパコ。」
「カンコン、タクワイ、パコパコ。」
「山菜買ってくださいなあー。」

ときどき、サリサリに置くために、山菜を買ってくれる家もあるけど、なぜか今日はぜんぜん売れない。

ワンワン、ワンワンワン
突然、サリサリの横から、犬が飛びだしてきた。

小さなジョイジョイが悲鳴をあげた瞬間、頭のタライがひっくり返って、パコパコが足もとに散らばった。

そのとき、クリステインには、ジョイジョイとは別の、小さな悲鳴が聞こえたような気がした。

ギンギンとクリステインは、ジョイジョイの前に立ちただかると、犬に向かつてさげんだ。

「シッシッ。」

「あっちいけ！」

ジョイジョイは、ギン



ギンたちの後ろにかくれた。黒と灰色のしましま犬は、大きな口から赤い舌をべろりとだして、白い歯をむきだしてうなりながら吠えかかる。

サリサリの小さな扉が開くと、なかから太った女の人が出てきて、大声で犬をしかつた。それでも、犬は吠え続ける。そこで女は、そばに落ちていた木の枝をひろい上げると、犬に向かつてふりあげた。

キャンキャンキャン
犬は、女主人の怒った顔と、ふりあげた小枝を見て、悲鳴をあげて逃げだした。

ギンギンとクリステインは、頭の上のタライを下におくと、散らばったパコパコをひろって、ジョイジョイのタライにもどしていった。太った女は、子どもたちを見て、一瞬あわれそうな顔をした。

(続く)

電話番号：080-4423-2998 (日本から現地直通)

09219603640 (Tomo Matsui Cell phone in Philippines)

日本事務局；Fax 専用 093-473-7710 (内容は本部に転送されます)

メール：mclstaff@zar.att.ne.jp(松居友)

Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

貧しいからといって、必ずしも不幸とは限らない
私たちの生活の方が、豊かな国の人々の生活よりも
はるかに美しいと感じるときだってある。
けれども、どうにもならないのが、
一日三食たべられないときと、
お金が無くて学校に行けないとき
病気になっても病院に行けないとき・・・



ミンダナオ子ども図書館支援方法

- 1、医療や読み聞かせ活動を支援して下さる方々へ・・・自由寄付（購読料のつもりで気軽に）**
直接下記の振替口座をお願いします。寄付をくださった全ての方々には、
年四回、4月、6月、8月、10月、12月に季刊誌『ミンダナオの風』をお送りしています。
- 2、大学生高校生スカラシップ支援の方へ・・・年額60000円（月額5000円）**
振り込み用紙の通信欄に「スカラシップ」と書いて、一部振り込んでいただければ、
年5回の季刊誌に同封して、本人からの手紙、4月スナップ写真、6月に成績表
8月にプロフィール、10月は機関誌のみ、12月にクリスマスカードなどが届きます。
新規奨学生の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。
文通やプレゼントも可能です。訪問の際は、自宅にご案内します。
- 3、里子支援（小学生）・・・年額30000円（月額2500円）**
振り込み用紙の通信欄に「里子」と書いて、一部振り込んでいただければ、季刊誌に同封して、
4月にスナップ写真、6月は機関誌のみ、8月にプロフィール、12月にクリスマスカード
が届きます。新規里子の紹介は、随時プロフィールと写真をお届けします。
文通やプレゼントも可能ですが、隔月の学用品と一緒に僻地に届けて返事をもらうため
返事は機関誌に同封する形で半年ほど後になる可能性があります。訪問の際は自宅にご案内。
- 4、保育所・下宿小屋建設支援・・・30万円（分割可能になりました）**
振り込み用紙の通信欄に「保育所」または「下宿小屋」と書いて振り込んでいただければ、
季刊誌をお送りすると同時に、10月には毎年現地の保育所や下宿小屋の写真報告をお届け。
開所式参加や訪問も可能です。
- 5、植林環境支援・・・5万円（ゴムの木600本、1ヘクタール、現地作業代込み）**
洪水対策と先住民族が土地を手放さないようにするための、自立支援です。
- 6、古着等の物資支援・・・郵送およびフィリピン宅配フォーレックスが便利です。**

詳しくはウェブサイト参照「検索：ミンダナオ子ども図書館」
<http://home.att.ne.jp/grape/MindanaoCL/mindanews.htm>

郵便振替口座番号 00100 0 18057 加入者名 『ミンダナオ子ども図書館』
(インターネットバンキングも可能です) ■銀行名 ゆうちょ銀行 ■金融機関コード 9900
■店番 019 ■預金種目 当座 ■店名 〇一九店(ゼロイチキユウ店) ■口座番号 0018057

スカラシップ・里親に関する質問、または現地訪問その他に関する問合せは、電話かメールかファックスで。
日本事務局は、完全ボランティアのためFAXのみ受け付けています。

電話番号：080-4423-2998（日本および日本から現地転送・松居友）
09219603640(Tomo Matsui Cell phone in Philippines/ 現地携帯・フィリピン国内ではこの電話番号へ)
日本事務局；Fax 専用 093-473-7710（内容は本部に転送されます）

現地住所：Mindanao Children's Library Foundation, Inc.

Brgy. Manongol Kidapawan City North Cotabato 9400 Philippines